



二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

黒衣の少女探偵  
月読百合奈

つくよみ・ゆりな

小説 おかした 岡下 まこと 誠  
挿絵 あかさ あかさ  
ILLUSTRATION

第一章

月夜にたたずむ黒衣の少女

006

第二章

黒衣の少女は淫手の罠に墮つ

057

第三章

魍魎儀式に啼く黒衣の少女

109

第四章

不浄の浴尿儀式

163

第五章

黒衣の少女は淫靡な饗宴に悶える

199

## 登場人物紹介

Characters



つくよみ ゆり な  
**月読 百合奈**

木乃花女学園に通う、名門・月読家の令嬢。ミステリー研究部に所属し、ゴスロリ衣装を纏って学園内の難事件を解決する。しっとりとした長い黒髪と豊満な肉体が特徴。

は ざり なでしこ  
**葉桐 撫子**

百合奈のルームメイト。年齢よりも幼い外見をした少女。

つくよみ あや  
**月読 彩**

百合奈の従姉妹にして、木乃花女学園の校長。庶子のために様々な不利益を被ってきた過去がある。

ひろさわ みつゆき  
**広沢 満之**

月読家を恨み、女学園の寮を襲おうとする男。



### 第三章 彌姦儀式に啼く黒衣の少女

新任の女教師が初々しい声で英文法の説明をしている。女生徒たちは黒板と教科書とを交互に見やりながら熱心にノートを取っていた。

いつもと変わらぬ授業風景である。お嬢さま学校として知られる木乃花女学園の生徒には、私語をする者など一人もない。携帯電話の着信音が突然に鳴り出すなどという見苦しいこともない。女生徒たちは皆（少なくとも表面上は）行儀よく授業を受けている。制服をきちんと着て、淑やかに膝を閉じ合わせ、背筋は伸ばして。

そんな女生徒たちの中であって、ひととき異彩を放っている少女がいた。

月読百合奈である。

他の女生徒たちが紺のブレザーとプリーツスカートを着ているのに、百合奈だけはゴシックロリータの黒い衣服を身に着けている。

黒い布地で仕立てられたドレスは、格調高く典雅でありながら、どこか耽美的なものを漂わせていた。ブラウスには、丸襟の縁とパフスリーブの袖口に白いフリルがあしらわれている。腹部のコールセットには純白のレース布が張られており、ドレスの黒と互いに引き立てあっていた。黒いスカートは、くるぶしが隠れてしまうほどの丈があり、椅子に腰かけていると裾飾りのフリルが床に触れてしまいそうだ。

腰まで届こうかという流麗な黒髪を飾るために、頭頂部にはヘッドドレスを着けている。白と黒のレース布を重ね合わせてつくった髪飾りは、令嬢の長く美しい髪にエレガントな気品を添えていた。たおやかで細い手指には黒い手袋をはめている。

百合奈が好んで身に着け、『黒の令嬢』という呼び名の由来ともなった黒いドレス。

紺のブレザーと、薄青色をしたチェックのプリーツスカートを身に着けた少女たちの中で、百合奈がまどついている黒衣は目立つことこの上ない。

木乃花女学園は、放課後にこそ服装の自由が認められてはいるが、授業が終わるまでは校則で厳しく服装を規定している。公私の区別を重んじるという学園の教育方針の現れで、授業時間と放課後のけじめをつけるためだ。

それにもかかわらず百合奈が件の黒衣くたんを身に着けていられるのは、校長の月読彩がそれを許可したからである。「制服が汚損したために、やむを得ず私服の着用を認める」との通達が職員会議であり、ゴシックローリータの衣装がまかり通ることとなった。

もちろん百合奈が望んで制服を汚したのではない。不注意で汚したのではない。

汚されたのだ。男の精液で。

百合奈が彩の手中に堕ちてから三日が過ぎていた。昼間は授業を受けているが、放課後になるといつものようにミステリー研究部の部室には向かわずに、校長室へ行く。そこで、生身の男性を教材にして、彩から性の手ほどきを受けるのだ……。

「月読さん」

呼びかけられて百合奈は我に返った。秀麗な美貌は黒板の方を向いていたが、心ここにあらずといった風情で瞳は焦点を結んでいなかった。見れば、この春に赴任してきたばかりの若い女教師が心配そうな表情で令嬢の顔を覗き込んでいる。

「熱があるみたいだけれど、体調がよくないのなら遠慮なく言って構わないのよ」

言われて初めて気づいたが、頬が熱く火照っていた。肌が白いだけに、わずかな紅潮でも目立つのだ。しかも黒手袋をはめた手は筆記具を握ったまま完全に止まっている。

「い……いいえ。大丈夫ですわ。お気づかいくださり、ありがとうございます」

ぎこちない作り笑いをして、黒板の英文をノートに写し始める。才媛の百合奈があたふたしている様を、クラス中の女生徒たちが物珍しそうに見ていた。

「ならばいいのだけれど……」

気づかわしげに言ってから、教師は授業を再開した。

百合奈も、教師の口から出る流暢な英語に耳を傾け、黒板の英文に目をやる。が、いまひとつ授業に集中できなかった。英文を綴っていた手は速度を緩め、やがてはまた止まってしまう。下腹部がうずき、それとともに再び昨日のことを思い出していた。

獣のような四つん這いの姿勢で犯される自分。膣外射精を乞い願う百合奈の悲痛な叫びは、途中から歓喜の極みを告げるよがり声となってしまう。女陰から引き抜かれた男根は脈動しながら黒髪や制服に白濁液をまき散らす。そればかりでなく、令嬢の尿口からは喜悅の潮が勢いよく噴き出し、プリーツスカートのチェック模様濡れ染みをつくった。

その時に味わわされた快楽が思い出され、女唇がヒクンと収縮する。

(なんということでしょう。私、こんなにもいやらしい身体になってしまいましたわ……)

月読家の令嬢は、おのれの淫らな肉体を恥じた。

処女検査に名を借りた陵辱で純潔を散らされて以来、脳裏に浮かぶことといったらあの男根のことばかりである。おぞましくも逞しい姿や、天を衝きながら力強く脈打つ様子の臆奥まで入れられた時の圧迫感や充実感。抜き差しをされた時の甘美な衝撃。

少女から大人の女へとなってまだ間もないというのに、何度となく秘唇を貫かれているうちに百合奈は膣で喜びを得られるようになる。麗しき令嬢の秘めやかな器官は、野蛮な肉欲をみなぎらせたあの男根にすっかり馴染まされていた。

もちろん、広沢満之という個人に心を奪われたのではない。彼の象徴であるところのペニスそのものに魅了されたのだ。心ではなく肉体が。

処女を散華せしめられ、しかもその衝撃が冷めやらぬ間に気をやらされてしまったのである。打ち込みの一撃一撃が、性の刻印となって百合奈の秘唇に刻み込まれてゆく。肉根の抜き差しで性悦の絶頂に達し、子宮口に精液を浴びる頃には、性感のすり込みが完了していた。女肉の最も奥深くが、生まれて初めての男性器を忘れようもなく記憶している。

これから先、どんなに素晴らしい男性に抱かれようとも、初期設定された広沢の男根と比較してしまうことだろう。生涯消えぬ性の烙印。処女喪失は多くの女性が経験することだとしても、初めての男をここまで深く刻みつけられた女性は幾人いるだろうか。



それに加えて今の百合奈は、肉体のうずきとペニスの幻影に悩まされている。股間の中心部に息づく秘唇がうずうずと欲求不満を訴えるたびに、膺の裏にはあの男根の映像がありありと映し出された。ふとした拍子に男性器を思い出すと、秘唇がじつとりと潤みを帯びてしまう。さながら発情期の牝のようだ。

これほどまでに淫らな反応を示す身体になってしまったのは、令嬢の肉体に潜んでいた淫猥な資質が開花したからではあるが、そればかりではない。彩の手で装着された器具によるところも大きかった。

それは貞操帯。

銀色に輝くステンレスのクロッチが股間にぴったりと張りついている。股当ては逆三角形をしており、それぞれの角からは鎖が伸びてベルトに繋がっていた。左右の二本は脇腹のあたりに。秘唇にあてがわれる部分の近くから伸びている鎖は、尻の谷間にきつく喰い込みながら腰ベルトの背中側で留められている。

百合奈は探偵術の一環として普段から鍵の研究をしており、簡単な錠前ならばはずすことができた。貞操帯ごときの鍵など、たやすく開けることができるはずだった。しかし令嬢が穿かされている貞操帯は、全ての鍵が背中側についているため、その技を発揮することとはできない。

(ん……くうっ。また……始まりましたわ……)  
気品ある美貌がほんのりと赤く色づく。

貞操帯に備えられた淫らな装置が発動したのだ。百合奈が身に着けている貞操帯は、浮気防止などを目的とした通常のものとは異なり、ランダムに振動する疑似男根が股当ての裏側に生えている。疑似男根は広沢のものよりも一回り小さいのだが、そのような異物を差し込まれていては、いつも膣孔はその存在感を意識していなければならない。

しかも、いつ作動しだすか全く予想できないのだ。何十分も動き出さないので油断していた頃、いきなり淫らな責めを開始する。かと思えば、振動が止まって安心していた時、不意に震え始めることもあった。振動の強弱も何段階もあり、それも予測不可能。

(うう……んんう……あ……あん……)

英文の朗読をどこか遠いことのように聞きながら、百合奈は懸命になつて声がもれるのをこらえていた。しかし秘唇に埋め込まれた淫具は、令嬢の思いを嘲笑うかのように容赦なく振動し、膣壁に甘い刺激を与える。執拗に女陰をかき回し、小刻みな媚動で秘められた粘膜をこすり立てた。格調高く優美な黒衣を身にまといはいても、そのロングスカートの内では疑似男根による恥ずかしく淫靡な女肉責めが繰り広げられているのだ。

百合奈は臉を閉ざし、額に脂汗を浮かべながら唇を引き結ぶ。声がもれるのをこらえることはできても、秘唇から熱い蜜がもれ出すことはどうしようもなかった。

股間の中心部から快楽がじわじわと広がってゆく。身じろぎをすることさえ許されないため、通常ならば身悶えによって発散されるであろうわずかな快楽さえも肉体に蓄積され、肉感美に恵まれた令嬢の肢体を深く蝕んでいった。

(……これしきのことで……負けてなるものですか)

そう自らに言い聞かせて気を強く持とうとしても、性感は臨界近くまで高まっている。湧き上がる快楽にあてられて目眩がした。今が授業の最中であるということすら、妖しい背徳の喜びとなって官能の炎を勢いづかせる。

女陰に淫猥な器具をくわえ込んで性の快感に身悶えしていることを、クラスメイトや先生に知られてしまったら。みんなの前でよがり啼きしながら気をやってしまったら……。

その妄想は、恐怖よりもなぜかほの甘い愉悅をもたらし、百合奈の肢体を熱くさせた。歡喜の極みを予感して身震いする。

女肉の喜びが一線を越えようとした瞬間、見計らったかのように振動が止まった。

(ふう……)

淑女にあるまじき牝恥をかくさずに済み、百合奈は安堵のため息をつく。

しかし、男を知って性の快楽に目覚めた肉体は、あと少しというところで逃してしまつた絶頂を惜しんで未練がましく秘唇を潤ませていた。得られそうで得られなかっただけに、もどかしさばかりがつのるのだ。はしたなくて恥知らずな行為とは知りつつも、できることならばトイレに駆け込んで秘唇を慰めたい。陰部にわだかまった欲望にけりをつけたい。

だがそれは叶わぬ望みだ。たとえ股間に手を忍ばせたとしても、指先にあたるのは硬いステンレスの感触だけ。百合奈の秘唇は貞操帯によって封印されており、自分で慰めることすらできないのである。

こうして百合奈の女肉は、貞操帯によって熟成の度合いを深めさせられていった。膣孔に打ち込まれた疑似ペニスの存在を常に意識させられており、自分が『女』であることを否応なく思い知らされる。

いつ振動を始めるかもわからないので人造ペニスのことが片時も頭から離れず、しかも氣をやることはできない。自慰すらもできずに悶々とさせられるのだ。

ほんの三日前までは清純であつた令嬢は、今や慢性的な肉体の発情に見舞われていた。秘唇はいつも欲求不満を訴えており、もし貞操帯を脱がされたのならば、どんな男性でも見境なく求めてしまひそうだ。おのれの淫らな身体に嫌悪感を抱きつつ、黒衣の姫君は肉体のうずきを鎮めようとして人知れず苦闘する。目をぎゅっとつぶってうつむき、黒手袋をはめた手を握り締め、女性器を悩ます淫情をやり過ごそうとしていた。

それに加えて、もう一つの恥ずかしい欲求が百合奈の下腹部に湧き上がってくる。年頃の女の子ならば、表立って口にし難い生理的欲求。

(ああ……もう効き始めましたのね……)

今朝、彩に錠剤を飲まされた。浮腫の治療に用いられるその薬は、尿管での水分再吸収を抑制する効果があるという。つまり利尿剤である。

一時限目と二時限目は貞操帯に氣を取られてあまり意識せずに済んだが、昼前になって急に催してきた。ひとたび意識の端にのぼると、尿意は加速度的に膨張して令嬢を悩ませる。膀胱はばんばんにふくらみ、溜まったおしっこを早く放出して欲しいと催促してくる。

しかし今は授業の最中。よしんばトイレに行っても、貞操帯を着けているので小用を足すことはできない。股当てには尿水を逃がすためのスリットなど備わっておらず、我慢しきれずに失禁でもしようものなら、女にとつては耐えがたい惨めな有様になってしまうだろう。嘔き出した小水は股当ての裏にぶつかって跳ね返り、女性器は水浸しになる。クロッチと太腿の隙間から小水はあふれ、無様に垂れ流されるのだ。おまけに後始末をすることもできず、股間を尿まみれにしたままその後を過ごさねばならない。しばらくすれば肌の熱に暖められて、黒いロングスカートの中はおしっここの臭いで蒸れ返るだろう。

（せめてこの授業が終わるまでは我慢いたしませんと……）

何とかして排尿の欲求をやり過ぎそうと、机の下で太腿を力いっぱい閉じ合わせた。

が、それで気が紛れたのはほんの一時。ほどなく、もじもじそわそわと太腿をこすり合わせずにはいられなくなった。はじめは他の人に気づかれぬよう遠慮がちにしていたのだが、知らず知らずのうちに動作が大きくなってゆく。

そうこうしている間にも尿意は高まる一方だ。膨張しきった膀胱は、ほんの少しでも尿道口を緩めてくれるように訴えかけてくる。

（絶対につ。絶対に粗相などするのですか）

甘く危険な誘惑を退け、錬磨された意志力で尿口をきゅっと締めつけた。すると、連動して膣孔も収縮してしまい、膣に埋め込まれている筒淫具の存在を再認識させられるのだ。膣壁はひとりでに蠕動<sup>ぜんどう</sup>して、性欲のうずきを癒すべく異物に吸いつく。

秘唇に燃えさかる淫ら火と、尿道口をちくちくと刺激する排尿欲。いつの間にか百合奈の思考は、下半身を煩わせる二つの欲求によって手一杯になっていた。

「百合奈さん、本当に身体の具合は大丈夫？」

女教師に再び声をかけられ、百合奈はあわてて顔を上げる。級友たちも皆こちらを見ていた。どうやら先生から指名されたのに気づかず、太腿をこすり合わせていたようだ。

「重ね重ね失礼いたしました。体調は少々すぐれませんが、ご心配にはおよびませんわ」

「そう。なら、問題五の単語を並び替えて」

「はい……。承知いたしましたわ……」

尿水ではちきれそうな膀胱に気をつかいながら、そっと立ち上がる。ゆっくりと歩を進め、普段よりもさらに淑やかな仕草で黒板の前までいった。

いくつもの視線を背中に感じる。教室の前に出ているのだから当然と言えば当然だが、自分の下半身に渦巻いている恥ずかしい欲求を見透かされたような気になってしまう。

フリルの飾りがついた黒いロングスカートの中では、脚を内股にしてよじり合わせている。かすかに腰を引き気味にして。本当は足踏みでもして尿意を紛らわせたいのだが、黒板の前ではそれもできない。じっとしていると、ひたひたと尿意の水位が増してくる。

ちらりと後ろを見ると、何人かの女生徒は百合奈の様子がおかしいことに気づいたようだ。怪訝そうな表情でこちらをうかがっている。その視線を意識すると、恥ずかしさがかこみ上げてきて頬が熱くなった。

（しっかりなさい百合奈。そわそわしたら黒の令嬢の名が泣きますわ。あと少しの辛抱よ）  
書き上げてピリオドを打とうとした瞬間……。

「はうっ」

裏返ったような高い声が教室の静寂を破る。女生徒たちも英語教師も、何事かと百合奈を見た。今や、教室内にいる全員が、令嬢の身体に異変が起きていることを察している。

黒衣をまとった姫君は電撃に打たれたかのように身を震わせていた。

貞操帯から生えている張形が、いきなり振動を始めたのである。しかも、これまでにない激しさで。細かでありながら力強い振動で、秘められた粘膜をこすり上げられた。

当の百合奈本人も、自分に奇異の視線が注がれていることは十分に意識させられている。しかし取り繕う余裕もなく、無言の注目を浴びながら、じっと恥ずかしさに耐えていた。

だが令嬢が抱いている羞恥心などお構いなしに、さかりのついた牝と化した秘唇はここぞとばかりに性感を貪る。喜びの涙を滴らせ、くわえ込んだ疑似男根を甘く咀嚼した。美の女神に祝福されたかのような肢体へ、小刻みな振動がもたらす快樂が駆けめぐる。

「あああ……」

百合奈の流麗な容姿がほのかに色づき、黒く澄んだ瞳は艶やかに濡れ潤んだ。

これまで渴望に喘いでいたもの。それを急に与えられたため、令嬢はほんの一瞬だけ、ここが教室であり今が授業中であることを忘れてしまった。女としての喜びに全てをゆだねる。身体中の神経は、秘唇から巻き起こる快樂を伝達するためだけに総動員された。

自身に差し迫っている尿意をも失念し、わずかに尿道口を緩めてしまう。  
ふしゅ。

心地よい解放感が尿道口を貫く。

「んあっ……」

しどけなく半開きになった唇から我知らず熱い吐息がもれた。腰がフルフルつと震える。  
ふしゅ、ふしゅしゅふしゅわあああ……。

自分の下半身に何が起こっているのか認識できぬまま、黒衣の令嬢は甘美な弛緩に身を漂わせていた……。が、呆けたような表情はすぐさま凍りつく。

小さな孔からは、途切れることなくものすごい勢いで尿水が噴射される。

「ああ、ああ……いやああああああああつ！」

煮えたぎった尿の熱さを下腹部に感じ、おのれがしでかしてしまった粗相を知らしめられた。絶望に打ちのめされ、遅いと知りながらも尿口を締めようとする。

しかし、女陰をかき回される快楽のために、下腹部に力が入らない。ひとたび緊張から解放された小孔は、だらしなく熱水をしぶかせ続ける。股間に密着した貞操帯によって尿は逃げ場を失い、女性器を汚しながら尻の方へと流れ下っていった。

おしっこは滝のように落ち、やすやすとドロワーズを染み通る。少しでも体液が滴るのを食い止めようとして脚をよじり合わせるが、百合奈の努力を嘲笑うかのように熱い尿水は太腿を伝ってすべり落ちた。





「いやっ。見ないで。みんなみないでええええ」

ふわりとしたふくらみのある黒いロングスカートの真下に、薄黄色の雨が降った。雨は瞬時に滝となり、床にできた水溜まりは見る見るうちに広がってゆく。

年頃の娘によるおもらし。しかも教師やクラスメイトたちが見ている前で。

「ああ……ああ……ああ……」

百合奈の気品ある整った美貌は、林檎のように赤く色づく。羞恥のあまりに目眩がして卒倒しそうだ。姫君が身に着けている黒衣には乱れも濡れ染みもないが、足元にはおしつこの池ができている。

唾然としている女教師。目を見張って水溜まりを見つめている少女たち。

驚き。軽蔑。蔑み……。

そして妖しい好奇心。

級友たちの視線が百合奈の肢体に絡みついてくる。

（ああ……もう、もうこの教室に来られませんか）

優美かつ耽美的な黒いドレスを身に着けた淑女が、年端もいかない小娘のようにおしつこをもらったのだ。

女生徒たちから向けられる視線には、他人の生理現象を覗き見てしまったことへの秘めやかな興奮と、いくぶんかの後ろめたさ、そして微量の嫌悪感が入り混じっていた。

「ゆ、百合奈さん。あなた……やっぱり身体が……」

「はああああつ、お……おしっこおつ、気持ちいいですわあつ」

百合奈は、おのれが最も卑しい牝女に貶められたことを実感させられた。女教師に命じられての痴態演技とはいえ、尿水をかけられて感じてしまったのは紛れもない事実だ。

恥辱の業火に精神を灼かれるとともに、意識の奥底から淫蕩なものがこみ上げてくる。

極度の性的興奮に見舞われて陰核の小さな身は先ほどからぷつくらとふくらんでおり、包皮から顔を覗かせていた。しかも秘唇が割れ広がっているので、花びらの合わせ目に息づく過敏な肉粒はこれ以上ないくらいに無防備な姿をさらしている。

そこに勢いよく噴出された一筋の尿水が直撃した。

「ひあああああああつ！」

公園の男子便所で、乙女の恥じらいも淑女の慎みも忘れて百合奈はよがり啼く。

感じやすい女芯にとって、おしっここの水流は激しすぎる愛撫となった。いきなりの刺激を受けて姫蕾に快楽が弾ける。つつたような感覚で、そこがおかしくなってしまったかと危ぶむほどだ。その直後にじんじんとした甘い痺れに襲われ、小さな肉突起は電撃に打たれたかのように細かく痙攣する。桃色の肉花びらは左右にめくれ返り、蜜にまみれた膣口は男性器を求めてきゅうきゅうと収縮した。

百合奈は壁に両手をついたまま背筋を大きく反り返らせる。女肉便器として捧げた尻がひくんと跳ねた。全身に甘美な愉悦がゆきわたり、脚に力を入れていられなくなる。快楽のうねりに延髄を突き上げられて何もかもが官能の喜びに染め上げられる。

はからずもおしつこの刺激だけで気をやらされてしまったのだ。

わななく美脚を内股にして、壁にもたれかかるようにしながらずると崩れ落ちた。男子便所の床にできた大きな尿水溜まりに、美尻を浸して横座りしてしまう。

（わ、私としたことが……なんとあさましくふしだらな……）

恥所に尿を浴びせかけられてよがっつてしまい、挙げ句の果てに歡喜の頂にまで追いやられてしまったとあつては、まさに彩の言つたとおりの淫乱牝である。

しかも、女教師の手で調教されたふしだらな身体はまだまだ満足していない。おしつこの水流に刺激されて気をやらされたとはいえ、膣穴も肛門も微熱を帯びてひくひくと蠢き、もつと硬いものでえぐられたいと訴えている。女体の内側に燃え上がった官能は気をやったことはいよいよ勢いを増し、男性器を打ち込まれないことには鎮まりそうになかった。

見上げれば十人もの男子高校生たちはみな短パンをずり下ろし、黒々とした陰毛から男根をそり立たせている。どの肉棒も欲情に硬く強ばり、亀頭の割れ口を先汁にぬめらせていた。女肉を喰らいたいとばかりに天を衝いてそそり立っている。

（どれも……私の身体を欲しているのですね……。でも……）

発情して肉体は牝と化していたが、百合奈の中でかろうじて生き残っていた淑女の貞潔が最後の一線を越えることをためらわせていた。つまり自ら懇願して秘唇を貫かれることを。操を穢されたくはないが、女肉は男を求めている。貞潔の徳目と燃えさかる淫情との葛藤に悩んだ末、しどけなく唇を半開きにして見せつけるようにして舌なめずりした。

「み、みなさまのペニスを……お清めいたしますわ……」

貞潔と淫情の狭間。立て膝になって男たちの足元にひざまずき、亀頭の鈴割れに吸いついて尿の後始末をした。屈辱的な奉仕をしていることを自覚すればするほど、淫美な黒衣に包まれた肢体は高ぶる。全員の亀頭を清め終わるとそのまま口唇奉仕へ移行した。

「ああああ……く、ください……。みなさまの……おちんぼ……」

生ぐさい恥垢の臭気さえ官能を刺激する媚香となった。目の前で勃起している三本のペニスを濡れた眼差しで見つめる。手近にあった男根を左右の手で一本ずつ握り、びくんびくんという力強い脈動を手の中に感じながらしごき上げた。真ん中にそびえている男性器には唇でご奉仕する。たつぷりと唾液を載せた舌で肉胴を満遍なく舐め上げた。のっぺりとした亀頭に口づけし、うっとりとした表情とともに唇の奥深くに吞み込む。

「ん……んむうう……んんっ……」

優雅なヘッドドレスを着けた頭を上下にふり、肉欲に張りきつた肉瘤を貪りしゃぶった。じゅるじゅるという唾液音をさせて吸引し、ねっとり舌を這わせる。美尻をうねり舞わせて太腿同士をこすり合わせ、うずく花唇に刺激を与えてやりながら。

「んんっ……おいしい……おちんぼ……おいしいゅうございますわ……」

令嬢の理性は、このまま口唇奉仕だけで男たちを満足させることを主張している。深窓の姫君にとって、男どもに姦淫されることはやはり越えがたい一線だ。しかし官能にうずく肢体は、牝欲に爛れた秘唇を硬い肉棒で思いきりえぐってもらいたがっている。

ふと、男たちのぎらついた凝視とは異質な視線を感じて、男子便所の入り口に目をやった。樹の陰に彩と撫子が立っている。女教師の手は、童顔少女の股間に縄がけされたレースリボンをくいくいと引き上げて、まだ男性を知らない初な花唇をこすっていた。しかし眼鏡の奥に光る瞳は、百合奈が矚られる様子をじっと見つめている。その眼差しは無言のうちに、早くペニスをくわえ込むように催促していた。

（あ……そうでしたわ。撫子のためにも、あそこに精液を注いでいただかないと……）

心では恥じらいに啼泣しているはずなのに、官能美あふれる肉体は喜びと期待に悶えている。ついさっき尿水で流されたばかりだというのに、無毛の姫唇はもう粘液で潤んでいる。両手に握ったペニスで身を支え、快楽に痺れた脚でよろよろと腰を持ち上げる。剥き出しの尻を揺らして挑発し、亀頭をむしゃぶりながらうわずった声で哀願する。

「み、みなさまの……ん、ペニスを……私のおま○こに……ください。ふつつか者ですが……んふう……みなさま方の性欲を……ん……解消していただきたいんですの……」

恥辱に満ちた口上だが本音でもあった。肉体は一層のことうずき返る。

黒の優美なロングスカートはまくり上げられて留められたままなので、肉づき豊かな尻が剥き出しで後ろへ突き出されている。尻の丸みやその谷間、秘唇は、男たちの尿にまみれていた。しかも秘唇は、百合奈自身が分泌した体液に濡れ潤んでいる。尿水に穢され、亀頭をしゃぶり、それでも女肉を発情させているのだ。牝としての性欲がわだかまりにわだかまった尻を男たちに向けて差し出し、小さく円を描いて疊惑的にくねらせる。

「いいぜ……。腰が抜けて足が立たなくなるくらい犯ってやるよ」

手しごきと口唇奉仕を受けている三人以外の男たちは、餓えた野獣のような勢いで百合奈の尻肉に群がってきた。各々ペニスの根本を握り、姫唇を目がけて一斉に腰を突き出す。亀頭同士がぶつかってこすれ合うのもお構いなしに、鰓でつばぜり合いをしながら女陰を目指してせめぎ合った。肉欲に我を忘れて、牡の本能が命ずるままに腰を突き出す。

「ああ……んっ……そ、そんなにたくさんは……は、入りませんわ……あんっ……」

悲鳴にも似た切迫した嬌声は、肉の猿轡をかまされてくぐもった呻きになってしまふ。

しかし膨張しきった男根に唇をふさがれていることは、百合奈にとつて幸いであつたのかもしれない。もし口をペニスに占領されていなかったら、聞くに堪えない淫らな嬌声を男どもに聞かせてしまったことだろう。

太い鰻の群れが小さな餌に喰らいつくように、丸々とふくれた亀頭の群れに花唇をつつかれた。すりこぎを使うかのごとく、先汁にぬらついた鈴口をぬりぬりゆとこすりつけられる。肉欲にみなぎりきった七本の男性器が激しく争いながら姫唇をこすり、花びらをかき分け、膣口をえぐり、女蕾をついばむのだ。

（い、いっばい……おちんぼがいっぱいですのおつ）

亀頭の群れによるせめぎ合いは、令嬢におぞましくも甘美な快楽をもたらした。広沢のものどすられたことは何度もあるが、複数の肉瘤で同時に責められたのは初めてだ。ぬらぬらとしたものに秘められた粘膜を蹂躪され、たまらずに腰を揺する。

おぞましきゆえのことではもちろんなく、群れをなして襲いくる男性器たちにどうしようもなく官能をかき立てられ、女の喜びを味わわれたからだ。輪姦、それも順番待ちができないほどに餓えた牝たちによるものならではの異形異端の愉悦だ。

「あつ、そ……そんなに……入らな……あひつ、あつ、んんっ……んうううう……」

こらえきれずに唇から肉棒を吐き出し、歓喜に満ちた悲鳴を上げる。だがすぐに後頭部を押さえつけられて肉の箝口具かんこうぐをかまされて声を封じられた。

熾烈な競争に勝ち抜いた一人が、とうとう肉根の秘唇への挿入を果たす。

「んっ……んうううううっ！」

露出散歩や尿洗礼によつて高ぶりきつていた女陰は、待ちわびていたものを突き入れられて有頂天になった。若々しいものを奥までくわえ込み、潤いを帯びた粘膜でしつとりと包み込む。絡みついて甘く吸引する。それら膣孔の淫らな蠕動は意識してのことではないが、女教師の徹底した調教で、ひとりでに男性をもてなすように仕込まれているのだ。

膣壁の蠢きは肉棒をもてなすだけではなく、腰全体がとろけてしまうような快楽となつて百合奈自身にも跳ね返ってくる。膣口がひくんとすぼまっただけでそこに打ち込まれた硬い物の存在を思い知らされ、長く美しい脚は内股ぎみになつて快感にわななく。

もちろん牝の獲得争いに勝利した牝が性器を打ち込んだままで満足するはずもなく、豊かな尻肉をむぎゅつと驚つかみにして荒々しく腰をつかい始める。技巧こそまだ稚拙だが、牝を犯して種付けしようという本能に基づいてただひたすら男根をえぐり込む。



(あ、あああ……す、すごいですわ……。でも……そんなにされたら私……あんっ……)  
単純な抜き差しだが野蠻なまでに力強い。挿入されただけでさえ脚がわななくほどの快楽を味わわれたのだから、抜き差しによつて腰が抜けるほどの悦楽を与えられた。絡みつく粘膜をかき分けるようにして一気に奥まで打ち込まれると、摩擦と衝撃でめくるめく歓喜が駆け抜ける。打ち込みの一撃ごとに子宮は喜びに震え、心は快楽に溺れた。

種付けの機会にありつかなかった男たちは、百合奈の太腿に亀頭をこすりつけたりありつたけの性欲を手のひらに込めて肉感的な肢体をまさぐる。やはり彼らが一番の標的にしているのはたわわに実った乳房だった。手に収まりきらないほどの大きさを誇る柔肉が根本からつかまれ、絞り上げられる。ブラウスの胸元にうがたれている穴からも手指の群れが侵入してきて、しっとりとして吸いつくような乳肌の感触を手のひらいっぱい堪能した。蚕のような食欲さで乳房の肌を喰い散らかす。黒いブラウスの下にもぐり込んだ手指は乳房を這いずりまわったり、乳首を摘んで揉み転がしたり、と狼藉の限りをつくした。

(あひっ……む、胸が……お乳が……。乳首を……ひねらないでください……。んはあっ)

百合奈は手荒な愛撫に身をよじりながらも、鼻にかかった呻きをもらしつつ亀頭をむしやぶり続ける。自身の胸を守ろうともせず、両手は変わらずに男根をしごき上げていた。

豊かなふくらみは快感を響かせるための肉樂器と化しており、揉まれれば揉まれるほど歓喜の音色を奏でる。充血した乳首は男の指に反応してびくびくと脈打った。何本とも知れぬ手で一斉にこねられ、搾乳され、百合奈の女体には官能の交響曲が鳴り響く。

(わ、私っ、全部捧げておりますのっ。口も……胸も……あそこもっ)

牡たちから求められる喜びを全身で食り、黒衣の令嬢は激しくよがり悶えている。口唇と手でペニスを奉仕し、胸や尻をはじめとして身体中をくまなくまさぐられ、女陰にはみなぎりきった肉棒を打ち込まれていた。大きな乳房を揉まれるごとに、乳を噴き出してしまふかと錯覚するほどの快感に苛まれる。尻の穴をまさぐられると背徳の甘い喜びにひくひくと指を喰い締め、そのリズムに合わせて膣孔も収縮した。ペニスを打ち込まれるたびに快楽の炎が噴き上がり、肉棒を頬ばった口でくぐもった呻きをもらしてしまふ。

(あ……おペニスっ、いいですわあ……あんっ、んはああ……すごい……)

激しい腰ふりが令嬢を淫らによがらせる一方、経験の浅い男子高校生にとっても性急な抜き差しは性感の暴走を招いていた。もはや彼の頭にあるのは肉欲だけで、ひたすらに百合奈の姫唇をえぐり抜く。雄叫びとともに男根が脈動を始める。

ぶぐっ、ぶびゅびゅゆゆ、ばびゅっ、ばびゅびゅっ！

それと呼応するかのように手でしごいていた二本と口唇奉仕をしていた一本も、同時に白濁液を噴き上げた。口内に熱く粘ついたものを注ぎ込まれ、すえたようないがらっぽい味に嘔吐感がこみ上げてくる。女の命ともといえる黒髪や顔にも容赦なくぶちまけられ、どろどろの白汁がこびりついた。膣奥にたつぷりと精液を放出され、どろりとした粘液のほとばしりを感じる。射精の最中も男は荒々しく腰をふり続け、膣粘膜は徹底的な摩擦にさらされた。脈打ちとともに肉棒を突き込まれて、激しい快感を味わわれる。



「んんっ……んううううう……」

くぐもった呻きとともに百合奈は二度目の絶頂に達した。待ちに待った膣交合による昇天である。快楽に浸りきって腰くだけになってしまった。しごいていた肉棒につかまり、口唇と女性器を貫くペニスを身を支えてもらっているという有様だ。

口からペニスを引き抜かれ、しどけなく開いた唇の端から精液が垂れ落ちた。令嬢は舌を出して、れろりと艶めかしく舐め取る。目の前にある三つの亀頭に口づけし、尿道に残った精液をちゅるちゅると吸い出した。無毛の秘唇からも白濁液があふれ出ており、まだ物足りないと言わんばかりに膣口はひくひくと収縮している。

（ああ……またしても……気をやらされてしまいましたわ……）

深い陶酔に酔いしれるとともに、輪姦で気をやってしまったことへの恥ずかしさに責め苛まれた。これ以上の牝恥をかかないためにも肉体の高ぶりを鎮めたかったが、さかりのついた男子高校生たちはすぐに二本目の男根を秘唇にねじり込んでくる。

「んはあっ、そ、そんな……休ませてください……でないとまた……あぐうっ、んうっ」

哀願の言葉を発する唇は、欲望に膨張した肉柱によって封じられてしまった。

もはや舌や唇を働かせて奉仕する気力もなく、男に頭を押さえられて一方的に男根を抜き差しされる。貞淑に育てられた百合奈にとっては口唇奉仕ですら恥辱の極みであるのに、あまつさえ射精のための肉便器にまで貶められたのだ。唇は大きく開いたまま閉じることができず、鰓の張った肉茸で口内を蹂躪された。

気品漂う美貌も陵辱を免れ得ず、左右から突き出された肉棒にぐりぐりとこすりつけられる。それを恥じらう理性も今はあらかた消え失せ、牡に求められることを喜ぶ牝本能に支配されていた。胸が高鳴り、肉体は発情する。

膣穴への打ち込みは激しく、肉と肉とがぶつかり合う音が男子トイレに響いた。二人目の牡はそこに精液が溜まっていることなど頓着せず、おのれの性欲を満たすべく、ひたすらに腰を前後させる。ぬちゅぬちゅという音とともにかき回され、白いものがこぼれた。

（ああんっ、い……いいですわっ。おま○こお、とっても気持ちいいですわああ）

太く硬いものでえぐり抜かれるたびに、肉感的な肢体を快楽が突き抜ける。膣壁は歡喜にむせび泣き、きゅうきゅうと男性器に吸いついて貪欲にむしゃぶった。男は快感に駆り立てられてますます腰ふりを速め、そのことが令嬢をなおのことよがり悶えさせる。

百合奈の口唇と女陰を犯そうと、頭側と腰側とで順番待ちをする男たちの列ができていた。官能美あふれる肢体を責めきれずに男子たちは短時間で射精してしまうが、若さにまかせた回復力を發揮して再び挑みかかるのだ。

姫唇を犯していたペニスが精を放つとそれが百合奈にとってのわずかな小休止となるが、すぐに別の男根を打ち込まれる。下降しつつあった官能はまた昇り始め、射精によってまた下がり……といったことの繰り返しで、快楽のグラフは高い位置で波を描き続けていた。百合奈の深く澄んだ瞳は今や愉悅に曇って、微睡んでいるかのようだ。秘唇はとめどなく愛液を滴らせ、つぐむことのできない口唇からは涎が伝い落ちている。

男子便所の入り口にパンプスの靴音が響いた。男子運動部員たちは驚いてふり返る。立っていたのは眼鏡の女教師・彩とツインテールの童顔少女・撫子であった。

「お楽しみのところをごめんなさい。この娘も一緒に可愛がつてくれないかしら」

童顔少女のスカートは極端に短い。股間には純白のレースのリボンが縄がけされており、女教師は前と後ろのそれをつかんで交互に上げ下げしている。ふにとした花唇はリボンが喰い込んで真つ二つに割れ、しかも上下動によって秘められた粘膜をこすられた。間近で繰り広げられている集団強姦とも相まって、初々しい女肉はじくじくに潤んでいる。

（な……撫子っ。み、見ないで。私の破廉恥な姿を見ないでえ……）

百合奈は親友の視線を意識してあらためて自分の淫らさを思い知らされる。撫子のためとおのれに言い聞かせておきながら男根に刺し貫かれて快楽により啼き、浴尿儀式と輪姦で二度も歓喜を極めてしまった。あまつさえ撫子のことを忘れていたのだ。せめて今からでも血肉の通わぬ人形になりたかったが、女陰を男柱でかき回されると否応なく官能の喜びを味わわされた。肉棒にふさがれた唇からは媚びを含んだ甘い呻きがもれてしまう。

「あなたたちの輪姦を見ていたら、この娘も発情しちゃったのよ」

知的風貌の女教師の言葉で男たちはようやく事態を悟った。猫耳ヘアバンドをした幼顔の美少女が新たな女肉として彼らの前に差し出されたのだ。

「幼児体型だけど、この娘のお尻はよく仕込んであるから、とっても気持ちいいわよ」

婉然と微笑しながら女教師は女生徒の腰を抱き寄せ、小ぶりの尻を両手で割り広げる。

「く……ください。百合奈ちゃんだけじゃなくって、わたしにもおちんぽをください」  
上気した幼顔を男たちの方へ向け、舌足らずな声で肛姦をおねだりする。

黒い猫耳ヘアバンドと幼げな身体つきに触発されて、たちまち数人の男たちが撫子を取り囲んだ。一人の運動部員は、尻の谷間に喰い込んでいる純白のリボンをずらして、小さなすばまりに太い逸物をこじ入れる。そこは予想外にやわらかくて、それほど苦勞せずとも男性器を奥まで打ち込めた。膣孔にくらべて絡みつくようなしつとり感には欠けるが、狭さと強烈な締めつけで接待してくれる。アヌスの味を知って男は夢中で腰をふった。

「あひいいいっ、お……お尻い……いいですう。気持ちいいですうっ」

肛姦の快楽に緩む可愛らしい幼顔に欲情し、もう一人の男子学生はいなく肉棒をふにぶにとした尻肌にくすりつける。また別の男は撫子の手を取ってペニスを握らせ、しごくように命じた。幼顔の少女が矚られるのを肴に自慰にふける者もいる。

「な、撫子っ……はあああ、あんっ……んはああ……んんっ……」

百合奈は親友の身を案じて呼びかけるが、『黒衣の令嬢』らしい凜としたものが戻ったのは一瞬だけだった。女教師に抗議するはずだったが、欲望に張りきったペニスで秘唇をえぐられ、かき回されて、ふしだらきわまりないやがり声を放つてしまう。美しいアルトボイスで悶え啼く唇にはもう何人目とも知れぬ男根が打ち込まれ、肉の箝口具となった。

女の喜びを教え込まれた令嬢は、姫肉に肉棒を打ち込まれる快感や豊かな乳房を採みしだかれる愉悅に溺れ、友人を思う心も正義感や淑徳ごと溶けかかっている。

がんがんと突き込まれてくる牡の怒張に身悶えし、剃毛されて剥き出しになった姫唇はとめどなく歡喜の涙を流した。乳房を弄ぶ手には硬くしこった乳首で喜びの意を表す。快樂にあてられて口唇奉仕もままならず、しゃぶるといふよりは口唇を犯されていた。だが男たちはそんなことには頓着せず、しどけなく緩んだ唇へ容赦なくペニスを抜き差しする。百合奈の口唇は涎と精液にまみれ、すっかり肉欲汁の排泄場所にされていた。

「お嬢さまの尻も味わってみてえな。体位を変えないか」

肛門すらも陵辱の対象として狙われていることを知り、黒衣の令嬢は尻肉をすぼめる。

(や、やはり殿方はこちらもお望みになるのですね……)

背徳の裏門を犯されることへの抵抗感はあるが、穢れた器官にさえペニスを突き込んでくださることへの喜びの方が大きかった。百合奈の肛門は、撫子のものほどは開発が進んでいない。彩のペニスバンドを呑み込めるようになったのは最近のこと、昨日、やっと尻穴を犯されただけで気をやることができた。生身の男根を呑み込んだことはまだない。

(ああ……私のお尻を求めてくださるなんて……身に余る光栄ですわ。ですが、撫子のように殿方を喜ばせられるかしら。お情けをくださるかしら……)

口と秘唇からペニスを引き抜かれて、上体を起こされる。目の前にいる男に右足の膝裏を抱え上げられ、一切の陰毛を剃り上げられた秘唇をあからさまにされた。気品ある令嬢の淫らな女性器は、ひくひくと蠢いてとろりと精液を吐き出す。具合よく開かされた股間に亀頭が突きつけられ、姫唇を一気に突き上げられた。



「んはあああつあああ」

背後にいる男に両手で尻肉をつかまれ、豊かな肉を大きく割り広げられる。

谷間に息づく菊穴に男柱の先端をぐりぐりとこすりつけられた。

「お、お尻もおお、お尻も好きですのお。太いおちんぼくさいいつ」

秘唇への突き上げに黒髪をふり乱しながら、ふしだらな言葉で肛門性交を懇願する。それはもはや男を挑発するための演技ではなく、よがり狂った肢体が絞り出した真意だった。

巨大芋虫でもあるかのような男性器は令嬢の排泄器官をこじ開ける。小刻みな突き上げとともに、狭隘な管を拡張しながら掘り進む。

「はあつ、ああつ、あんつ……いっぱいっ、いっぱいですのおおお」

ヘッドドレスに飾られた頭は大きくのけ反り、瑞々しい朱唇は高い嬌声を放つ。膣孔にも肉の杭を打ち込まれているために、肛門をうがつペニスが殊の外に太く感じられた。まだ開拓途上の肛管は撫子のそこと違って硬さが残っていたが、若い牡望にまかせてねじり込まれるとおずおずと口を開き、とうとう肉棒の根本までくわえ込んでしまう。下半身に息づく二つの穴を男のもので同時にふさがれ、黒衣の令嬢は絶え絶えに喘いだ。

卑猥な黒衣に包まれた肉感的な肢体は、二人の男たちに前後から挟まれていた。

秘められた女孔を二つ同時に征服すると、男たちは交互にペニスを突き上げ始める。前の者が打ち込むと背後の者は引き抜き、背後の者が突き上げると前の者は退く。運動部員らしい絶妙の連携でかわるがわるに抜き差しし、高貴な女肉をペニスで貪り喰らった。

「あひいいいっ、そんなっ……ああ……はああ、あふっ、ひいっ、んはああっ」

膣孔と肛孔。薄い膜を隔てて二本の肉棒が激しくせめぎ合っている。快楽を追求して一方的に腰を突き上げる男たち。その雄々しく野蛮な行為に、百合奈は貞淑さも矜持も忘れてよがり悶えた。遅しいもので女の孔を二つともかき回され、えぐり上げられ、官能の淫ら火をどこまでもかき立てられる。調教によつて磨きがかかった膣は、随喜の涙を流しながら蠱惑的な吸引で肉棒を貪った。肛門は強烈な締めつけで男性を饗応する。

男子便所の中は、百合奈の美しいよがり声と撫子の幼げな嬌声が響いていた。ツイントールの童顔少女も二ヶ所を同時に責められている。秘唇は彩の手に弄ばれ、果汁を滴らせていた。女教師は女生徒の処女を守るとともに、淫らな手管でよがらせているのだ。尻は男のものに犯され、すでに幾人分もの精液を飲まされている。彼女が上げる声から察するに、もう何度も気をやらされているようだ。

百合奈も絶え間ない突き上げで快楽を味わわれ、数え切れないほどの性的絶頂に追いやられていた。男たちは膣側と尻側に二つの列をつくつて並んでおり、一人が射精するとすぐに次の者がペニスを打ち込む。無尽蔵の性欲で犯し続けていた。

「んはあああつ、ま、また……恥をかいてしまいですのっ。あつ、あひいいいっ」

黒衣の令嬢は途切れることなく延々とよがられ、いつしか快楽の絶頂から下りることができなくなってしまう。官能が鎮まる暇もなく男性器を突き上げられ、常に性感の頂にとどまっていた。身体はぐったりしているのに、なおも喜びを与えられたのだ。



煮えたぎる快楽にのたうって、女肉の芯にまで隷属の喜びをすり込まれた。

「ああああ……いいですわ。あそこもお尻もお、とつても気持ちいいですわああつ」

二つの肉穴は百合奈が意識しなくともひっきりなしに収縮して男根に最高級のもてなしをする。絶え間なく犯されているうちに、どちらの器官も名器に磨き上げられたのだ。

秘唇と尻に打ち込まれていたペニスがほぼ同時に熱い白濁液を噴き上げる。

びゅぶつ、びゅぶぶぶつ、ぶびゅびゅびゅ、びゅ、びゅ、びゅつ……。

脈動して暴れまわる肉棒に二つの孔をかき回され、勢いよく射出される精液に秘粘膜を打たれ、高ぶりきった官能にとどめをさされた。

「だ、だめですの……もうこれ以上は……あつ、ああああつ、んはああああああつ」

背をのけ反らせてこれまでになく高いよがり声を奏でる。膣穴と肛門から快楽の火柱がうねり、令嬢の肢体を灼きつくした。今の百合奈が知覚できるのは下半身から噴き上げる快楽だけ。許容の限度を遥かに超えた快感を味わわれ、意識が遠のいてしまう。

再び意識が戻った時には、尻を剥き出しにしたまま男子便所の床に這いつくばっていた。秘唇や尻穴からあふれ出した精液を、四つん這いの撫子が舐め清めてくれている。

「ふふふ……。百合奈さん、よくやったわね。これであなたも立派な牝少女よ」

見ず知らずの男たちに輪姦されてさえ百合奈は女の喜びを味わわれ、あまつさえ失神をしてしまった。姿形は気品ある令嬢のままで、心も身体も完全な牝となっている。

あれだけ氣をやったのに、百合奈の女体は恥辱と快楽を求めて早くもうずいていた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**